高井城発掘調査による主郭部遺構図

郷州道と高井城址

相馬日記の訪問先

郷州海道

（県道 328 部分と守谷市道郷州沼崎線）

郷州海道は、相馬郡守谷の相馬氏の居城であった守谷城の大門、守谷城門前の愛宕社（野鳥の森）、みずき野の郷州小学校、上高井の桜坂、高井城址、岡の大日山を結ぶ古道でした。

平将門の末裔である、相馬氏の軍事通信用途の為の道と思われます。

台地乾燥化で湖沼の陸地化後には、成田街道に接続され銚子道と言われる様になりました。

昭和53年現守谷みずきの団地造成中に郷州原遺跡が出土縄文土器等が多数発掘されました。江戸時代は、誰の支配にも属せず、無主無住の免訴地でした。

相馬日記挿絵　偽都とは守谷を指します

高田(小山田)**与清**(ともきよ)**の相馬日記**

郷州という地名ですが、郷州原という湿地帯を含む原野であったことは明らかですが、地名の由来は不明です。

郷州街道という街道名が登場する文献は、相馬日記に「がうしう海道」として残っています。

街道を「海道」と記していますが、奈良時代の五畿七道が制定された時代から、街道は津や駅を結ぶ海路であったため海道と呼ばれていました。

やがて津や駅であった港は、利便性の良い陸上を利用する様になり、東山道に於いては山間部に駅が設けられるようになると、街道へと変化しました。

小山田与清は、天明三年(1782)、武州多摩郡小山田村(都下町田市)に生まれ、村田春海らに国学を学び、文化三年(1806)見沼通船方の高田好受(手賀沼干拓に功績のあった高田友清の子孫)の養子となる。

のち、徳川斉昭に乞われて「大日本史」編さんにも参画したといわれる江戸後期の国学者です。

その与清が、文化十四年(1817)八月十七日からの十一日間、下総国を巡遊した時の紀行文『相馬日記』を著しました。

与清の主な行程は、江戸→新座→岩槻→川口→野田→水海道を経由して、八月二十四日筒戸村の禅福寺を参詣し、その後、守谷に入り二泊、二十六日守谷を発って、布川→木下→成田→千葉→中山→市川→両国と巡る。与清は行く先々で地誌や伝承などを紹介し、感想の和歌も披露しています、守谷市近辺で訪ねた所は次の通り。長龍寺、牛頭天王(八坂神社)、相馬偽宮(守谷城址)、岡の延命寺、駒塚(駒形古墳)、太郎堰(岡堰)、仏嶋山古墳、大日山古墳、桔梗塚、守谷市高野の海禅寺、西林寺。

郷州街道とは

与清が相馬偽宮を訪れた時の一章節に、「この所よりは千町の田面打越し、奥山、一ノ台、向地(同地)、赤ぼけ、岡村、がうしうなどいふ所々、目路遥かにぞ見渡されたる。がうしうが原といへるは、田中の離れ島にて、縦横に上道一里余の広野なり。昔淡海の廻れる時は、えもいはぬけしきの島なりけむとぞ思ひやらるる。今、この野中を行く道を、がうしう海道とよべり」。この与清が守谷城址から見た「がうしう海道」を「郷州街道」といいます。

この古道は、下総相馬氏が守谷城と支城の高井城を結ぶ、軍用道として利用したとされます。また、愛宕地先で、天保十一年(1840)十月に造立された「二十三夜塔」が発掘され、その塔に「山王道」と道しるべが刻まれていました。

『郷州原遺跡発掘調査報告』より、但し、平成六年発行の『守谷の石造物』には掲載されていません。

この山王道とは、江戸時代末の利根川図誌でも触れている道で、山王新田で小貝川を渡り山王、和田、岡、寺原で守谷道に合流して、大鹿、取手白山に至る道です。岡村から先の郷州街道は、和田で「水戸街道大廻り道」に合流していました。

郷州街道沿いの旧跡、寺社、石造物、

(〇数字)は添付内の地図に記載

① 守谷城址　守谷市本町

② 愛宕神社　同右、将門の創建という

③ 羽黒神社　みずき野、江戸時代の創建

④ 八日講供養塔　同右

寛政三年(1791)造立、郷州原林中で発見。

現在、文化財公園に安置されている

⑤ 神明神社　上高井、長治元年(1104)創建

⑥ 香取八坂神社　取手市下高井

創建不詳、もと香取神社

⑦ 高源寺　取手市下高井、将門の創建という

⑧ 妙見八幡神社　同右、長治元年(1104)創建

⑨ 高井城址　同右

⑩ 延命寺（岡）将門ゆかりの上人の創建という

⑪ 地蔵大菩薩　同右、寛文六年(1666)造立

元の仏嶋山金泉寺跡

⑫ 仏島山古墳　同右　将門の兵器を埋めた所

⑬ 朝日御殿跡　同右、大日山古墳(遺跡)

将門の愛妾桔梗の住いという

14 蛟網神社　和田、江戸時代、和田氏の創建

境内に寛政十二年(1800)造立の道標有り

正面　向ふし志路、

右面　とかしら路、左面　とりて路

15 山王神社　山王、寛文十年(1670)創建

16 稲荷神社　神住、正徳三年(1713)創建

17 明光寺香取神社　中内、宝暦二年(1752)創建

18 荘厳寺　椚木、永禄元年(1558)頃の創建

19 相馬神社　藤代、元亨元年(1321)相馬氏の

創建という、もと八坂神社

20 熊野神社　宮和田、治承四年(1180)千葉常胤の

創建といわれています。

この街道は、相馬氏との関係が深かったことが判りました。また、相馬御厨の北限地に位置します。

但し、現在と違い、霞ヶ浦や手賀沼は香取灘という海の一部であり、海抜は零メートルの沼地であったと考えられます。その証に藤代には江戸時代以降の石仏しか見られません。島のように点在したな布川や小文間や岬の龍ケ崎や江戸崎の高台に陸地は僅かであったと思われます。

江戸時代になると、取手の渡し経由が水戸街道とされて、江戸から七番目の本陣が存在した藤代宿には文巻川(小貝川)を渡り、慈願院観音堂に至る渡し場「宮和田の渡し」がありました。水戸街道は八番目の宿場「若柴」、更に牛久へと通じます。

現在、岡の延命寺の先に郷州街道の面影を残す古道には、鎌倉時代頃建立の熊野社や相馬社だけが残り、今は陸地ですが、まさしく舟による旅の海道であったことの証と言える芦原と泥地でした。

岡台地を過ぎて低地に降りると、古道の追跡は困難を極めるが、幸いにも蛟蝟(こうもう)神社の「道標」で、この神社前を通って江戸時代の大廻り道に合流したことが窺えます。

岡から先の此の道は藤代、高須、道仙田を経て、布佐で成田街道へ繋がり、成田からさらに佐原、銚子へと銚子道とも云われています。

文巻川(ふみまきがわ、小貝川)**と道仙田**

小貝川の下流域になる河口から岡の二三成(ふみなり)橋辺りまでの間を該当する地域では「文巻川」と呼ばれていました。

郷州海道の東端は岡の大日山の館迄です。

江戸時代の頃には、香取海の乾燥化や利根川の東遷事業による河川や干拓などにより陸地化して、その地形の変化は多くの道や街道が出来て便利になりました。

郷州海道も海路部が道路となり、岡から延伸されて、山王道へ繋がり山王、藤代宮和田では水戸街道に接続、さらに小貝川沿いに道仙田(どうせんだ)河岸、戸田井、布川で利根川を渡り、布佐で成田街道に繋がりました。

道仙田は小貝川左岸側が巾着袋の様に湾曲した流れとなっていたために洪水が絶えませんでした。しかし、小貝川には数少ない河岸場が巾着部の底部の穏やかな流れの左岸に栄えていました。

現在は巾着袋の口の部分を開削し直線の水路となったために三日月湖と化し釣りの名所となっています。昔は巾着袋部分は取手に属していましたが、現在は龍ケ崎市になっています。

成田街道は利根川の河口銚子へ通じるために「銚子道(ちょうしどう)」と呼ばれるようになったのでしょう。但し現在、公の銚子道は千葉市、または大網白里市～東金市合流～匝瑳市(そうさし)～銚子の国道126号と銚子街道の我孫子市～佐原～銚子の国道256号の2線です。

銚子道という道路名は千葉県内の各地に散在していた、なま街道の一部に重複する所もありました。

高井城跡

高井城は、小貝川を北に臨む半島状台地に築かれました、取手市内で最も大きい戦国時代後期の城跡で守谷城の属城です。城跡全体は約200m四方の規模で、その内部は、主郭とそれに付属する二つの曲輪(くるわ)からなる中心部と、その外側に広がる外郭から成り立っていました。

標高は21m、小貝川に沿った低地からの比高は約10mあります。現在、城跡一帯は大部分が宅地となり、外郭遺構は一部分しか残っていないのですが、砦の中心部である主郭とそれに伴う曲輪は良好な状態で保存されています。

主郭は、南北65m、東西45mの正方形に近い形で、四方に土塁がめぐらされ、主郭南辺と西辺の土塁壁上に虎口(こぐち)が、南東端には櫓台が残り、主郭南辺と東辺の土塁は、主郭内でもっとも高く築かれています。

更に、その外側に堀が設けられ、主郭西辺には、半円形の張り出し部分と虎口、それに虎口外側には桝形状の遺構があります。

主郭内は東側から西側に傾斜しており、土塁に沿って排水溝と思われる遺構が確認されています。

主郭のあった広場の河津桜が咲きだすと、ハイカーや写真愛好家が訪れ、隠れた桜の名所でもあり。

第二郭は、主郭の東側谷地斜面(高井城址公園小貝川方)に位置していました。

第三郭は、現在案内板が設置されている西側の虎口、土塁と壕の向側林から妙見八幡社を含む一帯で、曲輪の東部分が消滅しています。

高井城がいつ頃築かれたかは明らかではないのですが、高井の地名は建武三年(1336)11月22日付の

相馬親胤宛「斯波家長奉書」に大鹿村とともにみえ、この時点で相馬氏の知行地であったことが分かります。天正18年(1590)に豊臣秀吉の小田原攻めの際、後北条氏とともに下総相馬氏が滅亡したため、高井城は城の役割は終えますが、館は残り家臣は廣瀬と名乗り帰農したといいます。

主な高井城主

相馬胤晴　父親の相馬胤貞が高井砦創建(不明)
天文15年(1546)4月20日　古河公方家臣、
高井城の創建は不明です。創建の時期を推察すると胤晴のころではないかと思われる次第です。
なお、相馬家直系は「胤(たね)」が付きます。

相馬治胤(はるたね)　(1541～1602)
相馬家21代当主。通称は孫三郎。官途は左近大夫。
父は高井(某)。妻は相馬胤晴娘。
本貫地は、下総国相馬郡高井村(取手市下高井)。
高井相馬氏の出身の治胤は19代相馬胤晴の娘と結婚して一門に連なりました。

◆　小田原の戦い
天正10年(1582)閏12月20日、足利義氏は病死し、翌天正11年正月13日、久喜の甘棠院にて送葬の儀が執り行われました。
この義氏の死に関して、治胤は「諸士為御弔言上候処、彼一人至于今日是非不申上」と、義氏に対して弔問を行いませんでした。さらに治胤は古河衆が「何与計策被申」であると、御当地栗橋の北条陸奥守氏照に注進し「下幸嶋各々知行分」を所望したようでした。
しかし、この治胤の策略を知った古河公方家の奉行人は、氏照に対して「相馬注進状写為披見給置」き、治胤の注進状は「近此無曲儀ニ候」とした上で、治胤は「如御存知前々御重恩相忘、違背上意候」であり、公方の葬儀に対しても一人弔問を行わなかった「無法人」であるとし、「畢竟彼地共成望、加様之侫人致之由、令分別候、向後之儀御塩味尤候」と、治胤のような侫人に下幸嶋を与えては今後痛い目を見ると断じたのです。
『古河足利家奉行人連署奉書』取手市史。
これにより、下幸嶋は相馬氏の所領としては認められなかった様です。
その後、治胤の活動はまったく見られなくなります。義氏葬儀後の弔問不参、偽計などが咎められて隠居に追い込まれたのかもしれません。
おそらく嫡男小次郎秀胤が跡を継ぎ、弟の民部大夫胤永が後見したか。
北条氏政、氏直が「一万五千余騎引率総州下向　其節氏直胤永於一里塚互於馬上対顔」したと「相馬当家系図」にあります。
天正13年(1585)の佐倉下向の際、胤永が氏直と軍陣の作法に則り馬上の対面をしたと云われています。
天正18年(1590)の豊臣秀吉と北条氏の小田原戦役に際しては、相馬氏は「惣馬小次郎　百騎」で城を固めていました。『北条氏人数覚書』取手市史。
「惣馬小次郎」は治胤の嫡男小次郎秀胤のことと思われます。
守谷城で相馬勢と豊臣勢とがどのような戦いを繰り広げたかは不明ですが、守谷の長龍寺には、天正18年5月付の「浅野弾正少弼、木村常陸介」連署の禁制が出されており、5月には守谷城は陥落していたことがわかっています。
小田原城落城後の治胤の動向はわからないのですが、『相馬之系図』によると、「属相州北條家勤仕、北條滅却之後、欲事関白秀吉公雖訴訟不叶、流浪之後、請信濃守胤信扶持、旁遺恨難散、於武州江戸山手思死云々、子孫断絶」とされていて、北条氏の滅亡後は、秀吉に旧領安堵などを訴えたものの認められず、流浪したのちに、信濃守胤信に扶持を請うたとされています。
ここに見える信濃守胤信は、おそらく相馬信濃守胤信のことと考えられ、彼は『寛政重修諸家譜』においては治胤の次男とされています。
治胤の嫡男小次郎秀胤が慶長2年(1597)正月15日に亡くなり、その跡を継いでいた次男信濃守胤信のもとで余生を過ごし、慶長7年(1602)5月6日、江戸にて六十二歳で亡くなったと云われています。
法名は了山悟公。

相馬胤永　(1558-1640)
父は相馬一族の高井(某)。十五代相馬左近太夫治胤の弟。通称名十郎。官途名民部太夫。号は覚庵斎。
十六歳から兄の治胤とともに戦陣に出て活躍し、各地で軍功を挙げました。永禄9年(1566)6月、治胤が守谷城を明け渡して北条氏に降伏すると、彼も北条氏の旗下に入りました。

天正９年(1581)８月、駿河の徳川家康の孫娘督姫が北条氏直に嫁いだことで、北条氏は西からの驚異がなくなり、本格的に北関東に軍事展開を始めます。

これを察した佐竹義重や結城晴朝、宇都宮国綱、太田資正らは互いに手を組んで、豊臣秀吉と同盟を結びました。こうした争いの中で、天正12年(1584)３月、北条氏直は佐竹義重と下総と常陸国境で戦います、この戦いに胤永が参戦しており、佐竹義重の猛攻に百八十騎を率いて佐竹の大軍につっこみ、佐竹勢を退却させたことを賞され、包永の太刀と贈り物を与えられています。後に包永は、兄治胤がほしがったため、彼に贈呈しています。

天正18年(1590)正月からおこった小田原の陣では小田原城に入城したとされています。

小田原落城後、胤永は家康に仕えて相馬郡高井村の知行を許されていましたが、慶長19年(1614)の大坂の陣の際、軍律に背いたために所領を没収され、相馬郡高野村へ隠居して「道仙」を称して寛永17年(1640)正月13日、八十三歳で没しました。

胤永の子孫の家には、平将門の兼光の太刀(兼光は将門に時代にはないため、南北朝時代ごろに相馬家に伝来したか)、相馬次郎師常の差料と伝来した三条宗近の太刀が伝えられました。

胤永の二男相馬十郎胤正は、一族の広瀬傳広の婿養子となり、広瀬家が高井に帰農すると、胤正もこれに従って農民になったといいます。

高井直将 (????-1591) 稲城主

相馬一族の下総北相馬郡高井城主か？通称は小四郎。官途名は下総守。

『東葛飾郡誌』によれば、相馬胤晴には「整胤」「直将」の二人の子がいて、永禄３年(1560)９月ごろに整胤が家臣に殺されると直将の嫡男治胤が継いだとあります。ただ、『相馬当家系図』によれば、直将は「無子孫」とあります。

永禄４年(1561)８月13日、小文間城(取手市小文間)の一色宮内少輔政良(政直？)が大鹿城(取手競輪場)の大鹿太郎右衛門が病となったことに目をつけて城を攻めたという。大鹿城は攻め落とされ、海老原但馬守が大鹿太郎右衛門を背負って稲城に援けを求めました。

このとき稲村城の高井十郎直徳が兵を率いて大鹿城を奪還、一色政良がこちらに軍を裂いている間に、一色氏は本拠地の小文間城を、我孫子の柴崎城主荒木三河守等によって攻め落とされました。

この戦いに見える「高井十郎直徳」がいかなる人物かはわからないのですが、直将と同年代の人物であり、さらに「稲村」城主とあることから、高井直将の一族なのか、明確ではありません。

相馬治胤の弟胤永は、相馬当家系図によると「高井十郎胤永」と称していたようで、通称がともに「十郎」であることから、直徳は胤永を指しているのかもしれないと推察されています。

『相馬当家系図』によれば、号は覚翁道本。

天正19年(1591)６月25日、亡。

http://chibasi.net/s-souma9.htm#itizoku

岡の大日山遺跡と仏嶋山古墳

岡には東国の皇といわれた平将門の伝説があります。相馬日記にも「子飼川のながれをせきとめし太郎堰(岡堰)といふ大堰あり。」と、太郎堰と江戸時代は言われていたようです。更に、平将門がまるで悪人のように記されており、現代の将門に対する見方とは大きく違う点が伺えます。

佛嶋山(ぶっとうやま)古墳は、既に発掘されていて男女２体の人面埴輪が出土しています。現在東博(東京国立博物館)に保管されています。悲しげで綺麗な顔をした人面埴輪です。

古墳には、将門社の祠が祀られています。

大日山遺跡には、現在岡神社が祀られておりますが、将門は愛妾の桔梗御前のために「朝日御殿」を建てて住まわせたとの伝説があります。

平安の時代ですから、大日山の周りは海だったと思われます。さぞかし景色が良かったのではないでしょうか。しかしこの館は櫓の役割をも兼ねていました。監視所という出城であり、その証拠が郷州海道という軍事用通信道であったと考えられます。

金仙寺は、永享元年(1429)２月頃の開山と伝えられています。創建当初は岡台地の仏島山にあったが、四世代証名誉上人の時に火災にあい、その後寛永５年(1628)に堂宇を現在地に移したとされています。

浄土宗派、本尊はこの阿弥陀如来坐像ですが、制作年代や作者についての確かな記録は残っていません。市指定文化財であるこの阿弥陀如来坐像は、制作様式などから鎌倉時代の作とされており、保存状態も良好で市内においても類のない貴重なものです。

岡不知（おかしらず）と呼ばれる岡

岡は別称「岡不知」と呼ばれていました。

不知の意味は、知らないこと、平家の落人集落に使われたのか、歴史上に於いては平家が絡むことが多い様です。不知とは落人の隠れ郷。

千葉県市川市の葛飾八幡社の近くに八幡藪不知があります。水戸黄門はこの藪の立入禁止の掟を無視して、藪の仙人に怒られた、という逸話があります。

一説に将門が朝廷軍と戦ったとき、将門軍の鬼門に当たった場所であるとされています。

岡には、延命寺の向側の農家に熊野社が庭先の斜面にあったそうですが、そこの家主の話では、将門が京都にいた頃の守護社の神官が祖先で、岡に移って来た。と話されていました。

岡は将門配下の落人部落だったのでしょうか。

相馬霊場資料　郷州街道

相馬日記より

「相馬日記」は高田与清（ともきよ）の文化14年（1817）8月17日～27日までの下総各地の巡遊記です。

四巻から成っています。版本は文政元年刊行の四冊本で、鹿島神宮の宮司で国学者北條時鄰（ときちか）が注を付しています。

巻の三の全文を載せてありますが、省略した巻の二は、お累（るい）の怨霊絹川かさねが淵です。

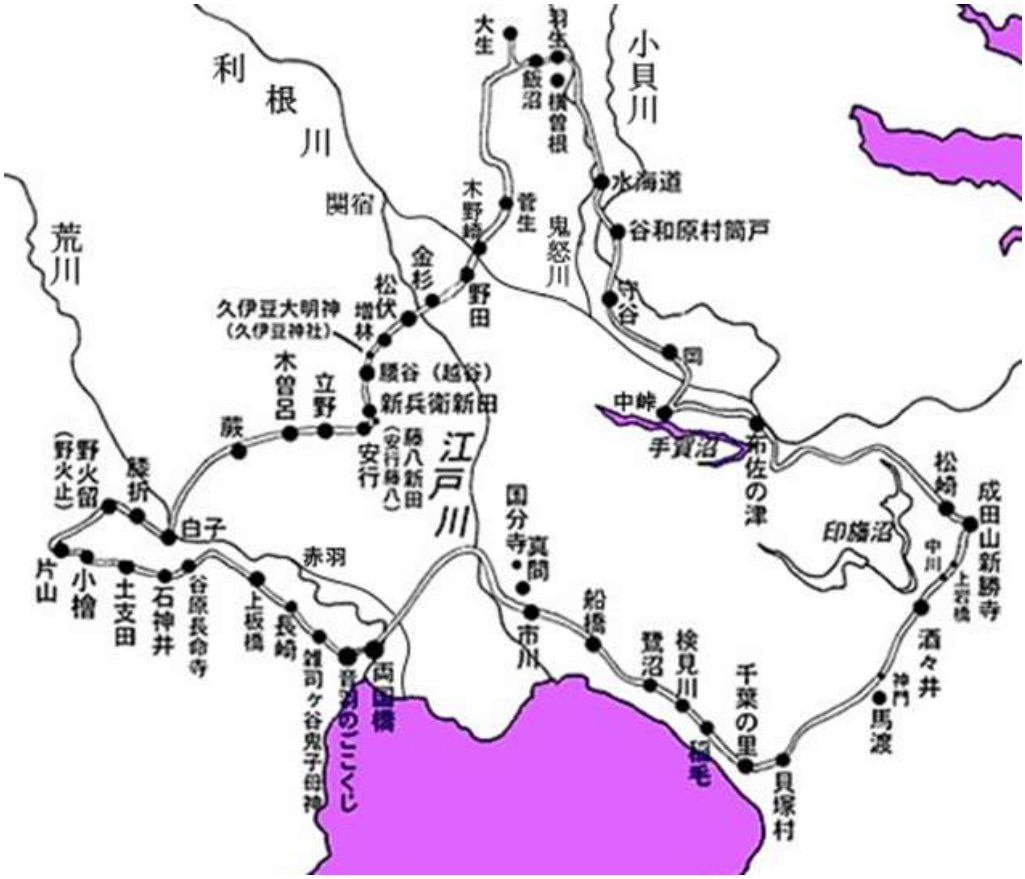
巻の三は、相馬郡とその周辺になります、

相馬日記巻之三

廿四日、きのふの雨なごりなく晴たれば、三思のをぢ、順行（みねなり）、傳四郎、などともなひていづ。筒戸村の禪福寺といふにまうでて、洪鐘（おほがね）の銘（ことがき）をよむに、大日本国下総州相馬郡筒戸村、普門山禪福寺、萬治三庚子天、七月初三日、住持當山中興開山大麟玄綱比丘尼銘罵（だいりんげんこうぐくにめいず）、とあり。本尊は平將門が渇仰（かつごう）せし等身の十一面観音の木像也。もと上総国の花岡といふ里よりうつしまゐらせたんなりといへり。等身の由来（ゆゑよし）は二中暦（にちゅうれき）に見ゆ。

寺のかたへにいとふるき石卒都婆（いしそとば）あり。ゑりたるもじなければその姓（かばね）と名とをしらず。寺僧（てらのほうし）は相馬氏のおくつきじるし（墓印）也といふ。また玉山宗雪（ぎょくざんそうせつ）、慶長十六己二月今日、とゑりし五輪あり。連歌師（れんがし）などのここにて身まかれるにや。

守谷野はいとひろき野にて目もはる（遙）に見かすむばかりなり。これ相馬の僞都（※いつわりのみやこ）



のかまへの内にて、もののふらがいむかひ(射向)し跡なりといへり。くすし木村文伯この所に出(いで)むかへて道しるべす。矢田部海道を經てゆけば守谷の里なり。

徳恰山(とくいざん)長龍寺の門に、浅野氏と木村氏とが花押(かきおしで)せしふるき制札あり。また牛頭天王の社ありて、その御形(みかた)は鏡に坐(まし)ます。裏に下総國守谷郷(さと)、牛頭天王守護所、大同元年丙戌九月廿一日、神主吉信、と鋳つけたり。

牛頭天王とまうすは素盞嗚尊なるよし、備後風土記、祇園縁起、簠簋内傳(ほきないでん、安倍晴明伝)、などに見えたれど、蘇民將来や、巨旦(こたん)将來がつたへは、もと天笠(てんぢく)の故事(ふるごと)によりてつくり出たりと見ゆ。文伯が家にてものくひなどしつつ、しばしいこふ。三思のをぢはさりがたきことありとて、ここより野田の里ざま(方)へあかれ(別)いきぬ。むらぎみ(村長)の齊藤徳左ヱ門が家をとぶらひしに、あるじよろこびて、俳諧師鳥醉(はいかいしてうすい)がこの里に遊びしをりしるせし記(ふみ)などとう(取)出て見せたり。さて徳左ヱ門文伯道しるべして、相馬の僞都の舊跡(ふるきあと)とめてわけいるに、まづ相馬小次郎師胤が城跡(しろのあと)ありて、今にから壕(ほり)升形などのさま、むかしのままに殘れり。師胤は千葉介常胤が三郎子(さぶろうご)にて、その裔(はつこ)あひつぎ、應仁年中まで、ここの城主也といへり。

後元和といふ年のころ土岐氏の君ここにすまれしが、上野國(こうつけのくに)沼田城へうつらしてより、此城遂にすたれぬとぞ。畠(はた)の中道を東へ廿町(はたまち)あまりゆけば、大壕(おおほり)、曳橋(ひきばし)、などいふ所あり。平の臺(だい)といふはいとたかき岡にて、ここぞ將門がずみし所なる。まためくるめくばかりの深きほりきをわたりて、八幡廓(はちまんぐるわ)にうつる。將門がいつきまつりし妙見八幡とまうすがここに鎮座(しづまりまし)しを、今はこもり山の西林寺にうつしまゐらせたりといふ。こは將門記や今昔物語に、人ありてくちばしりていはく、我は八幡大菩薩の御使なり。朕(わ)が位を蔭子(いんし)將門に授く。速(すみやかに)に音楽を以て迎奉(むかつれ)れと、託宣ありけるよし見えたれば、その神官をやがて將門が城中(しろのうち)へ建(たて)たんなるべし。妙見八幡宮とまうすよし登。妙見菩薩と相殿(あひどの)にまつれるにや。此所よりは干町(ちまち)の田面(たも)うちこし、奥山、一の臺、向地(むかいぢ)、赤ぼけ、岡村、がうしう、などいふ所二、めぢ(目路)はるかにぞ見わたされたる。齊藤氏かたりけらく、いにしへは、相馬の僞都のめぐりは、すべて湖(あふみ)たたへて、またなき要害(ぬま)の地なりしを、寛永といふ年のころ、鬼怒川の流を南へ決(さくり)て、數萬頃(あまた)の新田(にいた)をば開かれしといへり。今もなほ田の眞中(みなか)に池のこりて、蓮などの生たるがおほかり。つらつら相馬とおほせし名のよしを考るに、所の躰淡海(さまあふみ)の中の一庭なれば狭場(さには)といひけんを、音便(こえのたより)にさうまともうつし(轉)いふなるべし。がうしうが原といへるは田中の離島にて、たてぬき(縦横)に上道(かみみち)一里あまりの廣野(ひろの)也。むかし淡海(あふみ)のめぐれる時は、えもいはぬけしきの島なりけんとぞおもひやらるる。

今此野中を行道(ゆくみち)をがうしう海道とよべりそもそもがうしうといふ名(な)何(なに)とも心得がたきを、よくおもへば、將門記今昔物語などに辛島と見えしを、がうしうとはよこ(訛)なまれるにて、辛島の廣江といへるも、此めぐりの田となれりし所をさせる也。辛島と名づけしよしは、このくにのものともおもはれず、けしきのいとおもしろく、唐国の島ともいひつべきさまなればにや。または大和国の輕島(かるじま)とかよひてきこゆれば、それとおなじ心ならんもしりがたし。

古事談には島慶山(しまひろやま)と見ゆ。これもひろき島山なればしかよぶべきこと也。

岡村の林兵ヱ、和田村の由右ヱ門等このわたりにまちむかへたれば、道しるべせさせて、岡村の眞王山延命寺にまうづ。

うしろの林中のおほきなる樅(もみ)の木の下に墳(つか)ありて、ちひさき石の小祠(ほこら)あり。

かたつかたにこのはくづ(木葉屑)にうづもれて、五輪のかけのこれるがあり。

四十年前本尊地蔵薩埵(じぞうさった)の開帳せし時、此墳(つか)の中より瓶(かめ)ひとつ掘出せりとぞ。其をり將門が七人武者の塑像(はにがた)と、馬のはにがたといふものを、開張まうでの諸人(もろびと)に見せたりしが、七人武者の土形(はにがた)をば瓶とともにふたたびここにうづめ、二(ふたつ)の馬の土像(はにがた)をば駒墳(こまづか)にうづめぬといへり。

駒墳は寺の南のかたへにあり。此土形どもは布施の辨天のみあらか(祠)に年ひさしくつたはりしをこ

ひもとめて、將門が時のもののやうにいひなせしなりとぞ。按(おもふ)にこはいにしへの葬送具(はふりっもの)にて、土師宿弥(はじのすくね)がつくり出て殉死人(しぬるにしたがふひと)にかへしものの類(たぐひ)なるべし。

寺の北の方なる子飼川のながれをせきとめし太郎堰(岡堰)といふ大堰あり。洲崎(すざき)のあらら松原に辨天の御廉香(みあらか)ありて、そのけしき繪に書たらんやうなり。ここの見わかしなる所に、常陸國筑波郡足高(あたか)といへる里の山を掘れば、土饅頭といふものおほ(多)かりとて、餘(まろ)におくれる人あり。そはおほきなるちひさなるかはらけのさまして、花に似たるかたあり。から國にて海燕(かいえん)といふ貝はこれなるべし。本朝里人談(りじんだん)に、周防国吉敷郡(すぼうのくによしきごおり)高原氷上山(ひのかみやま)の土中よりも土饅頭(どまんじゅう)といふものいづといへり。されどかたちは今のとはおなしからず。

佛島といふは堀をめぐらしてかまへし所に、草木しげりくらがりて、おぞ(怖)ましき古墳なり。中にとば(少許)かり草おひぬ所あるを、つよくふめば、地にひびきありてきこゆ。これやこの兵器(つはきもの)などあまたうづみしがゆゑに、その鐵氣(かねのけ)によりて、草も木もおひ出ぬなるべし。里人これを將門が墳(つか)なりといへり。佛島と名づけしは、かたへに地蔵の石像(いしのみかた)、又は何くれの佛の石像たてれば也。

坂をのぼりて高き岡に大日堂あり。ふるき松などありて、ながめよろしき所なり。

將門がうたれし跡なりといふ。つらつら此堂のさまを見るに、古墳の上に建たるなり。これ將門が骸(かばね)を埋(うづめ)けん所にて、かの佛島は件類(ともがら)のしかばねや、兵具など埋たんなるべし。

米野井の桔梗が原といふは、將門が妾(おもひもの)桔梗の御前(ごぜん)といふが殺されける所にてその墳あり。今も桔梗はありながら花咲ことなきは、この御前がうらみによれるなりといへり。

海禪院といふもほどちかし。そこは將門が高野山のさまをうつして、先祖の墓をつくりし所也。

此寺の新皇堂(しんわりどう)といふに、將門が霊(たま)をまつりて、国王明神とたたへたり。

こもり山の擁護山西林寺(いようござんさいりんじ)は、ふるくは茶畠山清浄光院(ちゃばたやましゃうぐくわうゐん)といへりとぞ。八幡廓(はちまんぐるわ)より移しすゑまゐらせたる妙見八幡の宮あり。

この寺あるじ鶴老師は何くれのみやびに心よせふかくて、東都(あづまのみやこ)のきこえ人にも交(まじはり)を結ばれし人なり。餘(まろ)がとぶらへるをよろこばして、そうこ(弟子)たちに茶を煮させなどしつつ、もてなさるるさまいとまめまめし。年ひさ(久)しくひめつた(秘傳)へたんなりとてひらき奉られし、大御紳(おほんかみ)の御かたの掛繪あふぎ見奉りし屯、おぼろけのちなみならずと、たふとくも、かしこくも、涙とどめがたきまでにぞおもほゆる。

順行(みちなり)、傳四郎、文伯など、その外ともなへる人々(ひとびと)も、たふとさのあまりにこゑを出してなかざるはなし。

今宵(こよひ)は文伯が家にやどる。鶴老師齊藤氏相ぐしておはしたれば、よもすがら宇治大納言物語のこうぜち(講説)して、人人丑の四(よつ)などといふころにね(寝)ぬ。

けふめぐり見し相馬の僞都(守谷)のさまをおもふに、上道(かみまち)四里ばかりがほどにて、湖(あふみ)の中島なれば、上もなき要害(ぬま)の地なれど、おほやけにそむき奉りしかば、わづか九年(ここのとせ)ばかりにひとつかど(一門)ことごとくほろびにき

此將門が相(かたち)を今の世にはおぞましくむくつけきをのこのさまにゑがくめれど、吾友行智優婆塞(わかともぎゃうちうばそく)が、秩父の圓通寺にて見し將門が木像(きのひとがた)は、いと柔和の相なりきといへり。こは誠にさるべきことにて、いかなる腹黒のものにもあれ、あまたの兵士等(つはものら)にたふとみゐや(敬)まはれて朝廷(おほやけ)をかたぶけ奉らんとしも企(くはだて)しをのこなれば、さまでの悪相なるべきことわりなし。

すべて大悪人はかならず柔和の相ありて、諸人に歸依(したは)るるものなり。

打見のさまよりねぢけがましくおぞ(恐)ましげならんには、たれか心をよするもののあるべき。

騒人松屋子(さうぢんしょうおくし)相馬の墟(ふるきあと)を過(すぎ)てよめる歌

かけまくも、あやにかしこき、久かたの、天津日嗣(あまっいつき)の、御位(みくらゐ)を、ぬすまくほりし、鷄鳴(とりがなく)、あづまの國に、刺竹(さすたけ)の都なす(如)城を、いかめしく、造りかまへて、ほど近き、國の司(つかさ)を、お(追)ひしぞ(退)け、討平(うちたひら)げて、ちはやぶる、あらぶる神と、人

みなの、おびえわななき、まつろひし、ひとご(魁)のかみ(師)も、おほきみの、まけのまにまに、官軍(みいくさ)を、率(ひきゐ)あともひ、いさみたる、いくさのきみ(大將)が、はなつ矢に、かうべ(頭)射させて、たまの緒(を)の、命死(いのちしに)けり、したがへる、うからやからも、沫雪の、けぬるがごとく、ことごとに、ほろびうせにき、その跡と、荒たる山に、雨の夜は、おにび(鬼火)もえいで、あしきもの(邪鬼)、すだまいをらび(驕魅(助語)哭、もろ聲に、狼さけび、猨(さる)やまこ、狐さわぐと、里人の、かたるをきけば、ぬば玉の、黒髪ふとり、村肝(むらぎも)の、心も消(きえ)て、いとも恐(かしこ)し

短歌、たつ浪の風に荒けん辛島(からしま)の

廣江(ひろえ)はあせ(淺)てお(音)もきこえず

廿六日、けふもていけ(天気)よし。文伯、傳四郎、などにわかれをつげて馬を成田ざまへすすむ。

林兵衛由右衛門(りんびょうゑよしゑもん)はなほ坂東道廿里ばかりおくいきつ。

酒詰村にて水戸路を横さまに經て、用水に沿てくだる。

馬手(めて)のかたの見やりなら山は、相馬郡小文間の第六天山(だいろくてんやま)といふ。ここにむかしはぬすびと(盗人)のあまたこもり居て、往来の人を引はぎなどせしに、今はあまねきおほんめぐみ(聖恩)によりて、さるわづらひもなしといへり。

取手のすく(宿)も遠からぬ間(ほど)なれば、吾友澤近嶺(さわちかね)が家をとぶらはばやとおもひしかど、いそぐ道なればさてやみぬ。近嶺はくちおもしろき歌人(うたびと)にて、せうそ(消息)このたびなどにたよりうれしくまなこのごはるるを、とはでしも過ぎるるはほい(本意)なきわざ也。彼きかばうらむべし。我もいとくやし。

戸田井の邊(あたり)にて文伯がおくりの人も馬もかへしやりつ。舟のまう(設)けまで、かねて文伯がお(虜)きてせしかば、平に布佐の津にはてぬ。

布川の里は東北の岸に見ゆ。このごろ順行、傳四郎、文伯、などがまめ(誠)しきあるじまうけの心ばへは、詞(ことば)にも筆にものべつくしがたし。

戸田井は小文間の内なれど、堤をへだてて子飼川の川邊にすむ田居(たゐ)なれば戸田居とはいへるにや。子飼川と刀禰河とのおち合にて、此所をせきとめたらんには、相馬はむかしの淡海(あふみ)の中島ともなりぬべきありさま也。

享保十三年といふとしに、吾とぼつおやの友清(ともすみ)の翁いさ(功)をしき心をおこし、千萬金(ちよろずのこがね)をすてて堤を築成(つきなさ)れしがゆゑに、二萬石あまりの新田(にいた)ひらけしといふ相馬郡の手賀沼も、とほからぬ所にあり。

その堤を今も高田堤とよべりとなん。

つき(築)なせし手賀沼堤つつむともいさ(功)をたか(高)だの名やはかくるる

印幡郡竹袋などいふ里を過(すぎ)て、埴生(はにふ)郡の安食川(あじきがわ)をわたる。この河は印幡沼のながれ也。安食の里より道を右にとりて、印幡沼のほとりをゆく。

道興准后(どうこうじゅこう)のいなぼの海とかかれし所なるべし。今はなぎさのかだ田となれるがおほかり。

むべしこそいなぼの海とおほせ(令名)けれ田となる岸にみてるとみ(富)草　松崎村といふ所よりつづらをりをのぼるに、駒も行なづみ、鞍のうへ平ならずしていとむつかし。此近きほどなる天竺山(てんぢんさん)龍角寺に龍神(りゅうじん)の社(やしろ)あり。

月ごとの朔日十五日廿八日には、いなぼ(印旛)の海の眞中(みなか)なる百丈穴(あな)といふより、龍燈飛(りうとうとび)あがりて、此社の御前(みまえ)にかかれるとぞ。

叉大(おほき)なる洞穴三(ほこらあなみつ)ありて、中に石だたみをしきまうけ、むかしは人すみけん跡とおぼしきに、かくれ座頭(ざとう)という妖怪(ばけもの)すめりとなん。

その洞穴の上に、国内第一の大なる松樹(まつのき)の、根はひとつにて七本にわかれたるがさしおほへりとぞ。

ゆきゆきて谷にくがれば、干抱(せんば)が池とて水おほくもなきがおり。野となれる所に松一本たてり。こはあるい(郭)なづめ(女)が、この池のあさみ(浅處)へ一日に干抱(せんば)の苗をうゑんとかせぎけるに、つかれこうしてし(死)にけるを、埋(うずみ)ししるしの松にて、干抱が池といふも、それよりおへる名なりといへり。

郷部村(ごうぶむら)に埴生(はにう)大明神の社ありて、鳥居に當國三宮(さんのみや)といふ額をかく。

こ(此)國(れが)神明帳には見えぬ神なり。

やうやう日もかたぶきゆけば、心いそぎせられて、はしり(馳)うち(策)もせまほしけれど、あやふげなる坂道なればいかがはせん。

駒のあゆみにまかせつつ、とかくして成田の里の不動尊の御あらかにまうでつく。

むかし見しにはやうかはり、棟をならべ、いらかをかされて、堂塔の装厳(いっくしき)たぐひなき霊場(のりのには)のありさま也。

別当(べっとう)を成田山(じょうでんさん)新勝寺といふ。眞言宗の大寺(おおてら)なり。縁起のことばをよむに、此不動尊の木像は、弘法大師刻奉(きざみ)らして、高雄(たかお)の神護寺の護摩堂(ごまどう)に年久しくたたせたまひしを、平將門がさわぎの時、勅(みことのり)を奉(うけたまは)りて、あまたのげんざたち(験者等)、賊徒降服のいのりをせられしに、廣澤の寛朝(かんてい)借正は、此霊像(れいぞう)を請(しゃう)じ、難波津(なんばのつ)より南海を舟にて送りまゐらせ、此里にする奉りて、丹誠をこらされけるが、その驗有(しるしあり)て、將門遂に貞盛(さだもり)秀郷(ひでさと)がために首を獲られぬ。また下総国生實郷(おひみのさと)の大巌寺(だいかんじ)の開祖道與(どうよしょう)上人が奇瑞(きずゐ)を蒙(かうぶ)られし事など、その外の靈驗いちじるきためし、擧(あげ)てかぞふべからず。

そもそも坂東に不動明王の古靈場(ふるきみあらか)三所(みところ)あり。

相模國大住郡(おおすみごおり)の大山寺(だいさんじ)と、武蔵國多摩郡の高旗寺と、この新勝寺となり。

大山寺は吾妻鏡に出て世人(ひと)あまねく知れり。

高幡寺(たかはたじ)は鎌倉大草子(おほそうじ)に見え、また寺に傳はれる文永十年の金鼓(わにぐち)の銘、康永元年に修理しまゐらせし挨蔓(えんまん)の記文(きもん)、應永廿年の勧進状(かんじんじょう)、などに委(くわしく)由縁をしるして、鎌倉公方家(くぼうけ)の崇敬(すうけい)ならびなかりし御佛(みほとけ)なり。

今三所(みところ)の中にこよなう参詣人(さんけいのひと)おほかるは、この成田の霊場なり。

今日もはだかまうでだんじきごもりなどいふ、おそろしき行(ぎょう)をつとめて、いりもみ奉る輩(ともかち)さへすくなからず。

くれはて、御前(みまえ)の町家(まちや)にやどりしに、隣にあつまれるをとこ女ども、さわがしうものいひうちさるが(戯)ひて、うまいたちせさせず。

夜追(よおい)の馬の鈴のおと耳ちかくきこえ、くちとりらがうし(丑)のくび(上剋)ぞなどいひすぐるは、いたうふけぬるなるべし。

相馬日記巻の三、3日間の順路

8月24日：　筒戸村の禅福寺(谷和原村筒戸)～守谷野(守谷町)～矢田部海道～守谷の里～徳怡山長竜寺～相馬の偽都の旧跡～千町の田面うちこし～奥山(守谷愛宕)～一の台(取手市市之代)～向こう(守谷市同地)～赤ぼけ(守谷町赤法華)～岡村(取手)～がうしう(守谷市みずき野)～岡村の真王山延命寺(取手市岡)～子飼川の太郎堰(小貝川岡堰)～州崎のあらく松原の弁天の御鹿香(常陸国筑波郡足高)～仏島(取手市岡仏嶋山古墳)

8月25日：　海禅院(守谷市)～こもり山の擁護山(守谷市西林寺)～西林寺(守谷)～妙見八幡の宮(守谷城妙見曲輪ではないか、妙見社跡有～里美村は？

8月26日：　酒詰村(さかづめ、取手市毛有)～相馬郡小文間の第六天山(取手)～戸田井の辺(取手市小文間)～布佐の津(我孫子市布佐)～布川の里(利根町)～戸田井？～印幡郡竹袋(印西町)～埴生郡の安食川(あじき、安食川)～印幡沼～松崎村(多古村)～天竺山竜角寺～千抱が池～郷部村(ごうぶ、成田市郷部)～埴生大明神の社～成田の里の不動尊の御あらか(成田市)～成田山新勝寺

平將門に関わる守谷城ではない偽都(ぎと)

相馬郡の偽都とか、相馬の偽宮とかいうことは、天慶の昔に平將門が経営したものとして、古くから史書軍記さまざまのものに記るされて大業に伝へられ、更に江戸時代には潤色され誇張され小説化されて、相馬内裏とか相馬の古御所などの名の下に浄瑠璃となり歌舞伎となって人の耳目に親しみ、普及しました。その相馬とは御厨と関係する相馬氏により築かれた守谷城が該当します。

別に偽都の地として猿島郡岩井を挙げた史書もありますが、岩井は営所であり將門が戦死した地であって居住の本拠ではありません。

当時の事を書き遺したものに「將門記」がある、唯一の実録ということになって居ます。

それには相馬とか守谷とかの文字は記されていませんが、各地転戦を記した中に、「本邑に帰る」「本堵に帰る」又「本郷に帰る」と書いた所が何カ所かある。本郷というのは幾分他の意味もないではないが、何づれにしても是等は地名ではなく、郷里の本

拠と解せます。又相馬郡の何処かであるべきことは、幾多の他の史書の記事の上から推定されます。

平将門は桓武天皇の後裔で上総介高望の孫に当り、鎮守府将軍良将の三男に生れ、相馬に居って相馬小次郎と称しました。

若い時から武勇に勝れ最も騎射に長じて居たといわれる。初め京都に上り、時の摂政藤原忠平に仕へて滝口の衛士となり、更に検非違使を望んだが、得られなかったため、不満で国に帰り相馬御厨の下司となりました。即ち守谷帰住となります。

この間、豊田郡に居り、又新治郡にも居たことが記るされてある。それから推して常陸南部から下総北部にかけ広く勢力を張って居たことが知られる。

豊田郡というのは今の結城郡の一部で水海道から宗道にかけ絹川と小貝川に挟まれた一帯です。

この頃常陸前掾源護の子の扶、隆、繁の三人が、女の事で将門にふくむ所があり、不意に将門を襲ったが敗れて殺されました。その時に将門の伯父の平国香は常陸大掾で国府(現石岡)に居り、三人を援けたので国香も亦将門に殺されます。

さらに、国香の弟の良兼は国香の子の貞盛と共に将門に迫り来ったのですが、是れも亦敗れました。

護は走って京都に之を訴えます。将門もそれを聞き急いで上洛して釈明しました。その為に将門は罪にもならず武勇の誉れを得て帰還しました。

その時、貞盛は兵を催し会々将門の居城である栗栖院常羽御厨に火をかけて攻め寄せますが亦郤けられてしまいます。貞盛は復京都に上り訴えた。

しかし、兎に角斯様にして将門の武勇は却つて益々附近にとどろく結果となったのでした。

是時に又常陸に藤原玄明という者が居り、官物を弁納しなかったので、国司の藤原維幾が之を捕えようとします。其処で玄明は救を将門に求めました。

将門は窮鳥ふところに入るものとして之を容れ、維幾を攻めて檎にしました。その折に丁度武蔵権守の興世王が武蔵の新司と合わず、下総に来て居たが、之を観て将門に向って、今一国を討つがその罪は軽くない、同じくば寧ろ阪東八国を奪掠してはどうかと説いました。

将門は、天慶2年12月に勢に乗じて下野から上野に進み、その守や介を追つて府庁に入りました。

この時、会々八幡大菩薩の御使が現われ神託と伝え、天位を蔭子将門に授くというのでした。

将門は、左右の者の勧むるままに自ら平新皇と号し、下野上野常陸上総下総安房の国々の守介を任命、百官を置き偽宮建設の企図をしたと伝えられて居ます。しかし、平将門は翌3年2月13日には早くも亡ぼされた所から観ても頓挫したといえます。

時を同じうして四国に藤原純友の乱が発生、朝廷は、急遽藤原忠文を征東大将軍とし、巨社大寺に反賊降伏の祈願を発令する事態にまでになったのでした。

将門に征東大将軍の任命はあったが、その出発の前に、貞盛は下野の押領使藤原秀郷の援助を得て共に将門に迫り、当時の滞在先の石井営所(現岩井)を襲います。将門は島広山に避けて之を防いだが、流矢に当って戦没しました。・・・・・・史料の大要。

将門亡の後、その首は京都に送られたが、遺骸は故国に残り、怨を含んで埋められたというので、それがいろいろの伝説と共に東国全般に亘って多くの将門関係の遺蹟を残すに至ります。

岩井市の国玉明神や島の薬師、相馬では米の井の桔梗塚や三仏堂、岡には岡不和の塚があり、佐倉には将門山があり、東京では神田明神に筑土八幡、旧大蔵省構内の古塚、芝崎の日輪寺など、幾百に到ります。

是れ畢竟は、将門が甚だ武勇に勝れて居たこと、東国一帯の人心を得て居たこと、それに怨を飲んで死んだことなどに対する同情と、かねてその憤りから来る祟りを恐れたことなどから是に至ったものと結論せざるえません。

守谷の故城址は、平将門亡き後の相馬氏により開城されて数百年を経由し、秀吉により小田原落城からは江戸時代になって、土岐氏や堀田氏の居城ともなりますが、下総相馬家は滅亡し守谷城は城主を失いました。

取手市和田の山王道と乙子線分岐の 50m岡寄

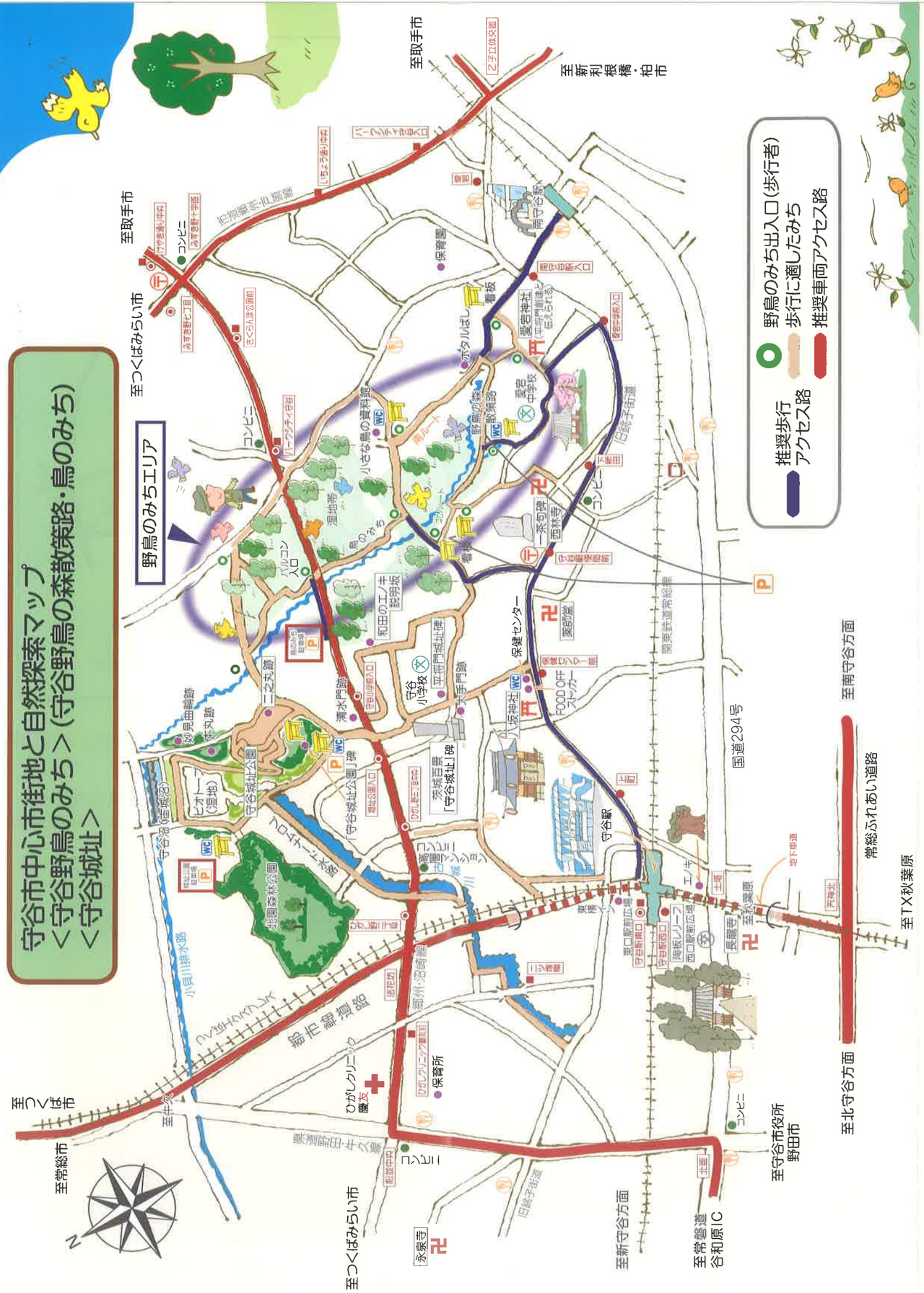
郷州海道地図

郷州海道： 守谷城址大門～②愛宕社～④郷州原(みずき野住宅)～⑥高源寺(下高井)～⑨高井城址～⑫岡(大日山岡神社)郷州道終点。

下高井高井城址公園本丸跡で静かに咲く河津桜、3月13日満開撮影。

新四国相馬霊場88ヶ所を巡る会　2022/03/27

守谷市中心市街地と自然探索マップ
＜守谷野鳥の森散策路・鳥のみち＞（守谷野鳥のみち）
＜守谷城址＞



市民手づくりの自然歩道の歩み

平成 13 年　市民有志・市職員でプランづくり
平成 14 年　小中学生参加で森の清掃開始
守谷市観光協会「野鳥の森プロジェクト」始動
平成 18 年　市立愛宕中学校野鳥の森少年団（全校生徒）の結成
平成 23 年　守谷野鳥の森散策路全 5 ルート 2.5km 完成
平成 27 年　鳥のみち（丸太道等）1.5km 完成
平成 29 年　つくばエクスプレスとの連携
市民団体と守谷市との地方創生推進協働事業に転換、高度化事業始動
民間整備団体「守谷野鳥のみち自然園」の設立
平成 30 年　鳥のみちの主要部 720m を板敷に全面更新，総称「守谷野鳥のみち」総延長 4km として新発足

アクセス

徒歩① TX 守谷駅ハ坂口～守谷野鳥の森散策路中央北口（約 30 分）②関東鉄道南守谷駅～野鳥の森愛宕南口（約 10 分）
バス① TX 守谷駅西口広場：市営モコバス南守谷 B ルート右回り愛宕中学校入口下車（徒歩約 10 分）② TX 守谷駅東口広場：関東鉄道バス取手駅西口行き守谷小学校入口下車（徒歩約 5 分）
車①市道郷州沼崎線守谷小学校職員駐車場近く標識「鳥のみち無料専用駐車場」（バルコン入口まで徒歩約 3 分）②市道（旧銚子街道）愛宕中学校入口から正門前を経て左へ敷地沿い約 330m 突き当たり駐車場所（中央北口）

バス路線図
時刻表

連絡先

※守谷市観光協会（事務局）
〒 302-0198 茨城県守谷市大柏 950 番地 1
守谷市生活経済部経済課商工観光グループ
TEL 0297-45-1111 内 269 Fax 0297-45-5703
Mail: keizai@city.moriya.ibaraki.jp
HP: https://moriyashikanko.com
※守谷野鳥のみち自然園
〒 302-0127 茨城県守谷市松ヶ丘 7-20-8
Tel 0297-20-6577/090-8170-1898
Fax 0297-21-8220
Mail: moriyashizen@gmail.com
HP: https://moriyashizen-en.com

（約３０名以上の団体利用は事前に事務局に連絡必要です。日程調整などをお願いすることがあります）

歩いてみませんか？

守谷野鳥のみち
（守谷野鳥の森散策路と鳥のみち）

水辺の宝石カワセミ

市民たちが
こころをこめて
つくった

守谷野鳥の森散策路（土の道）
～南ルート～

全面更新された鳥のみち（木の道）
～山王下口周辺～

「住みよいまち守谷市」のシンボル「守谷野鳥のみち」

1 利根川●鬼怒川●小貝川に囲まれた北相馬台地縁辺の自然林と昔は内海だった湿地
そこは、中心市街地の身近で大規模な里山と有機的な動植物連鎖のあるビオトープ
貴重な日本の原風景が残されています

2 静かな林間の「守谷野鳥の森散策路」(土の道)と明るい湿地草原の「鳥のみち」(木の道)が舞台
東京中心部から僅か **1** 時間のアクセスです

3 全周 **4km** の変化に富んだ手づくりの歩道では、時間がゆったり流れています

4 市民団体、ボランティア、小中学生、行政、地域の人々の手づくり、市内外企業の協力などで出来た、壮大な市民力結集のまちづくり物語です

民間の知恵と工夫、行政の知見、地元や企業の協力の凝縮

※中心市街地の隣、木漏れ日の森は野鳥たちと共生の「守谷野鳥の森散策路」(土の道)
変化に富む、全 **5** ルート総延長 **2.5km**
お好みのルートを選んで鳥たちのおしゃべりを聞きながら、素敵な土の道で、やすらぎのひとときを

北ルート

南ルート

ヤマガラ

水辺広場の木煉瓦道

※守谷野鳥の森散策路と守谷城址を結ぶ鳥のみち(木の道)総延長 **1.5km**
中心の新しい木道は、幅 **1.4m** 板厚 **7-15cm** 総延長 **720m**、歩きやすく、歩いて楽しい
市民が心をこめてヒノキ原木から削り出した厚板の質感が足元から心地よく伝わって
広々とした湿地草原と斜面林、東京近郊では珍しい、大規模でなつかしい里山に木道が溶け込んで行きます

カケス

※おしゃれな方向指示板や野鳥説明板

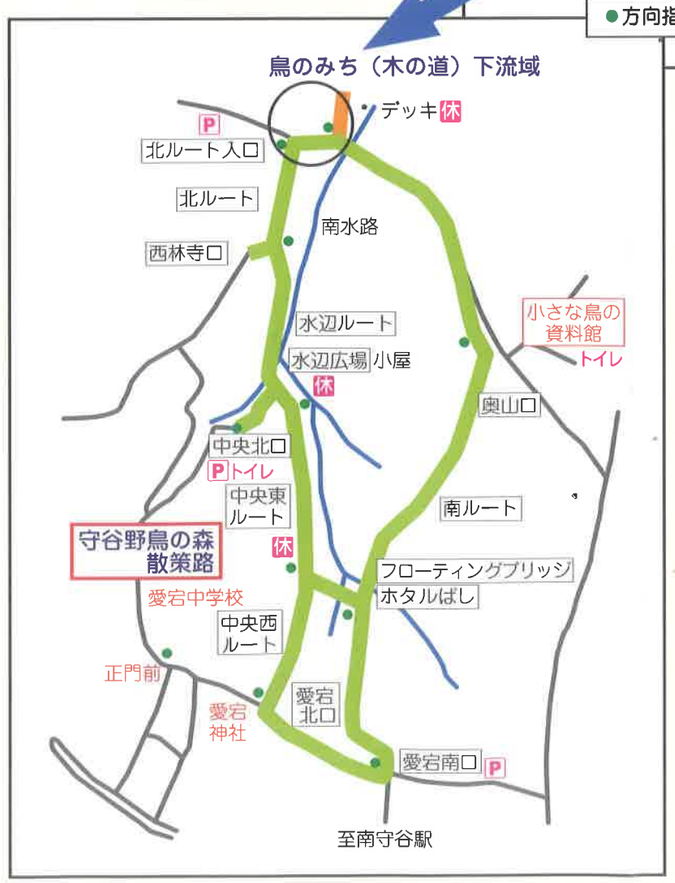
※主要道路と周辺道路に交通誘導案内板
TX 守谷駅八坂口から、「愛宕中正門前経由守谷野鳥の森散策路中央北口」、広域道路から「市道郷州沼崎線鳥のみち専用駐車場」にご案内します

※「ほたるの郷づくり」
「鳥のみち」の水辺環境に「石垣水路」**32m**、ゲンジボタルの棲息環境を整備中
2~1.5 億年前にできた三波石を使用、シダレヤナギのある多自然型水辺空間を演出

毎年4月になると
守谷に帰ってくるサシバ

しっかりした靴やズボンなど、
アウトドアの服装で来てね！

空の王者はオオタカ



「守谷野鳥のみち」の詳細

ルリビタキ

守谷野鳥のみち自然園 **HP**
https://moriyashizen-en.com

森の住人 イタチ

相馬家紋「繋駒」

新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り

下総相馬の高井城跡と郷州街道を歩く

大正昭和時代の岡堰の景色

「守谷野鳥の森と郷州海道の札所」

集合場所と時間：常総線南守谷駅前午前８時半、解散予定：常総線ゆめみ駅午後12時ころ。

守谷野鳥の森

別紙守谷市のパンフレットをご参照下さい。

郷州海道

別冊の「郷州道と高井城址」をご参照下さい。

打始

第四十九番、普蔵山普蔵院高源寺、臨済宗妙心寺派

樹齢一六〇〇年のケヤキと欅地蔵。

ご本尊、承平元年(931)平將門による釈迦如来、

移し寺、愛媛県西林山浄土寺、

御詠歌、十悪のわがみをすてずそのままに

浄土の寺へまいりこそすれ

永仁元年(1293)夢窓正覚国師大和尚開山、高井城主であった高井胤永(相馬次郎重胤)の菩提寺です、墓地内に墓石があり、先祖が家老職であった廣瀬家が守っています。

千葉県野田市と柏市に残る、利根運河を造った廣瀬誠一郎とその一族の墓と近隣に生家があります。

廣瀬誠一郎は、明治十五年群長という役職で岡堰の改修を行い、その後、利根運河の建設に遁走した、しかし、県令事業としては頓挫した為、民間会社「利根運河会社」を設立して運河を完成させました。

利根運河により、水海道や取手、土浦や銚子から東京への交通の便がよくなり相馬は潤いました。

鉄道が開通するまでの水運は賑わいました、守谷桟橋から東京まで上り十時間、下り六時間とか。

廣瀬誠一郎と利根運河 天保九年(1838)下高井に生誕、明治二十三年三月に他界享年五十四。

かつて利根川と江戸川間を航行する船は、両川が分岐する関宿を経由しなければならず、また、鬼怒川合流点までの利根川には浅瀬が多いため、渇水時には大型の高瀬舟では航行が困難という問題がありました。

利根運河計画はこれらの問題を解決するもので、茨城県北相馬郡選出の茨城県会議員であった、廣瀬誠一郎が当時の茨城県令**人見寧**(ひとみやすし、天保十四年(1843)～大正十一年(1922))に陳情し、人見がこれを受けて推進しました。

利根運河を派川(ばせん)利根川とも呼びます、また開削当初は利根川側の「三ヶ尾(さんがお)沼」名から三ケ尾運河ともいわれました。

利根運河の設計に当たったのがムルデルやデ・レーケ等のオランダ人技師で、工事は明治二十一年(1888)に開始され二十三年六月に竣工しました。

利根運河の開削により、関宿を経由して東京に向かっていた船は航路をこれまでより33キロも短縮し、日程も三日を一日に短縮することができました。

明治中期から大正時代にかけて隆盛をきわめた利根運河も、その後の鉄道の発達や道路の整備拡充により通船は減少の一途と水害の修復費により衰退して昭和十六年に、運河としての役割を終えました。

現在は水質改善の研究場所となり、水辺は親水公園として整備され、東武野田線運河駅近辺から運河沿いは、桜の名所にもなっています。

新四国利根運河霊場八十八ヶ所「倫書房」。

勝海舟と廣瀬誠一郎、勝海舟、文政六年一月三十日(1823/3/12)～明治三十二年(1899/1/19)

江戸城無血開城で知られる勝海舟は晩年、利根川の和田沼(わだぬま)に鷹狩りに訪れていたようです。

根拠は柏市布施にあった旅籠を営んでいた頃の先代の話を聞いている御子息からお伺いした話しです。

和田沼は、雁や鴨の渡り鳥の飛来地で江戸時代から雁猟で知られるところでした、シーズンになると布施の旅籠は猟師の宿泊客で賑おうたそうです。

布施弁天から利根運河までに大きな沼が六沼あり総じて和田沼といいました(現、田中遊水地 柏斉場下)、徳川慶喜や有馬候らの名士が明治二十年頃雁猟にお訪れていたそうです。

この頃、廣瀬と人見寧は親しい関係であり、勝海舟と人見寧は明治三年に薩摩へ遊学の際、西郷隆盛に面会を申し出る為、勝海舟から紹介状と十両の旅費を受けているほどの師弟仲でした。

「勝海舟日記」に、明治二十年二月十八日「人見、一人同道・・」とあります。廣瀬家に残る「書」の年月と同じ頃であり、「一人同道」こそ、勝邸に人見と訪れた、廣瀬誠一郎なのではないでしょうか。

更に、明治十二年四月六日「利根川を下り、キリップ(川の流れを弱める為に、川の中に杭を並べて打ちその中へ大きな割石を据えた護岸、伝統的な日本工法)を見る。初夜、帰宅」と記され、利根川に来ていることは間違いない。戦後は、なぜかＧＨＱが日本を制した戦後、米軍人がどこで知ったのか猟に来るようになり、和田沼から雁や鴨の姿は消えてしまったそうです。

第五十番、下高井村別当東光寺(廃寺)薬師堂、
下高井集会所、
ご本尊、薬師如来立像、
移し寺、愛媛県東山繁多寺(はんたじ)、
御詠歌、よろずこそ繁多なりとも怠らず
諸病なかれと望み祈れよ

取手市内で一番古い建物が集会所になっています、薬師堂の建物は十六世紀後半の遺構といわれています。礎石に乗せた柱や天井の垂木の加工に古さが伺えます。木造の薬師如来像が祭られています。

ガラス戸の大師堂は珍しく、羯磨(かつま)が描かれており割れないことを祈ります。

【四国移し寺の浄土寺】

空也上人が四国を巡歴し、浄土寺に滞留したのは平安時代中期で、天徳年間(957～61)の３年間、村人たちへの教化に努め、布教をして親しまれた。

鎌倉時代の建久３年(1192)、源頼朝が一門の繁栄を祈願して堂塔を修復したが、応永23年(1416)の兵火で焼失、文明年間(1469～87)に領主、河野道宣公によって再建されました。

空也上人像は、本堂とともに国指定重要文化財。

像高 121cm、木造、玉眼。口元から六体の阿弥陀小化仏を吐いている。本坊の庭に二代目の空也松がある。また、本堂厨子に室町時代から江戸時代にかけての落書きがあり、水戸から訪れた落書きが見られ貴重な歴史史料となっている。

高井城趾公園、河津桜が三月中旬に咲きます。
(別冊の「郷州道と高井城址」に詳しく説明)

永禄四年(1561)高井城主の高井十朗直将は大鹿城主である大鹿太郎左衛門の娘を正妻としていましたが、小文間城主の一色宮内政良(いっしきくないまさよし)によって闇討ちされた時、稲の出城から出陣して我孫子の柴崎城主の荒木三河守等と共に、雁金山(かりがねやま、現取手市城根(じょうね))の合戦に於いて、敵の一色宮内を討って取った武将です。

取手の歴史では名将として名を残しています。

この民話は「取手」の地名の由来にもなっていて、鳥手、鳥出、取出とも記された古文書が多数残されています。

大鹿城の砦は現在の取手競輪場の南側入口の坂左側に在ったと云われていますが、城址の形跡は全くありません。高井城址は取手で唯一その痕跡を残してくれました。

高井城は、長治年間(1104～1106)に信太小次郎重国が信太郡(土浦)から移り住み築城し、相馬氏を名乗ったという。建武三年(1336)の相馬親胤宛の「斯波家長奉書」に高井村の名が見え、相馬氏の知行地であったことを示している。

高井城主は代々相馬を名乗り、天正年間に高井下総守直将がはじめて高井氏を称したという。守谷城主の相馬治胤は高井何某の子で、守谷相馬氏に養子入りしているが、高井城主との関係は不明。

高井十郎民部太夫胤永のときに天正18年(1590)の小田原の役を向かえ、北条氏に味方したため没落した。このときに胤永の三男胤正の子秀胤が横瀬伊勢守保広を名乗って江戸時代前期まで居住したが、のちに広瀬氏と改め帰農したため廃城になったといわれる。

取手市内では城郭跡がしっかり残る唯一の城跡で公園として残されていますが、高井城の一画は現在宅地化されており、その規模は三分の一ほどになっています。

第五十二番、高井山妙音寺、下高井
(守谷の西林寺門徒寺でしたが廃寺)
ご本尊、薬師如来、**移し寺**、愛媛県瀧雲山太山寺
(りゅううんざん たいさんじ)
御詠歌、たいさんへ　のぼれば汗のいでけれど
のちの世おもえばなんの苦もなし

現在は、下高井下坪集会場となり妙音寺本堂はありません、大師堂は新旧２つあります。

東京浅草の松屋旅館の主と信者一行による寄進であると、大師堂脇の老婦が語ってくれました。

妙音寺も高井城内にあり、この奥百メートル先程には高井城の城門があったそうです。

妙見八幡村社、高井城内にあった相馬家の氏神です。
承平元年(931)平良文が孫(養子)の將門に加勢して兄の平国香と戦い討たれようとした時に童顔の妙見菩薩が現れて、敵である国香に剣の雨を降らせて良文は助かる、という伝承があります。
平家の子孫である千葉氏と相馬氏の守神でありま す妙見菩薩は北極星がある北斗七星を神格化したもので仏教の伝来と共に占星術上の方位を指す、十二支の子の方角である北を知る方法として中国西域のシルクロードより、倭国(やまと、大和、日本)に伝わり信仰されました。
我孫子市天王台の柴崎神社には、童顔の妙見菩薩が亀に乗っている石像が祀られています。
しめ縄の紙垂(しで、四手、垂とも書く)は白紙だが赤紙の場合がある、源平の合戦以後に平家のお落人部落に多いそうです。

岡の朝日御殿と桔梗田(沼)、平將門が七人の影武者に囲まれて朝日を拝んでいた。討伐使の藤原秀郷がこれを聞きつけ、秀郷の妹という説もある桔梗御前を「將門と和睦する」とだまして將門本人を教わり、こめかみが弱点であることを聞き出した。
將門は、天慶三年(940)二月十四日、茨城県猿島町幸嶋において、矢で撃たれて討ち死にした。
真相を知った桔梗は岡神社下の沼に身を沈めた。この沼はのちに田となり「桔梗田」と呼ばれたが、ここを耕作する農家の娘は嫁に行けないことが続き、現在は集落の共有地になったと伝えています。

仏嶋山古墳(ぶっとうざんこふん)、平將門の祠がある。古墳は、以前は大きく高さもあったが、学校用地の造成、岡堰の築堤などに土砂が採取され小さくなった。古墳の頂きの祠は平將門を祀っている。
東京国立博物館平成館企画展示、特集陳列「東京国立博物館コレクションの保存と修理」
期間 2010/03/16〜05/09、土師器(はじき、素焼きの土器「かわらけ」の前世の食器や埴輪)坏一個、茨城県取手市岡字大日仏嶋出土古墳時代は六世紀根本安雄氏寄贈 J-22703 考古資料相互活用経費による修理、他20品が展示されました。

明治時代の仏嶋山古墳発掘とたたりの話
「仏嶋」は岡台地の大日山を中心とした岡・和田・配松・神住地区を含めて中世に呼称された集落地で、俗称「岡不知」といわれた所の傾斜丘陵地の土をくずし、この土を運んで岡堰の築堤と道路改修の工事で明治ニ十八年に古墳が発掘されました。
この岡堰用水の工事を行っていた時に、古墳を真正面から掘削していた人夫たちは、怨霊にとりつかれます。古墳と言う神聖な地を開拓したため、事故が多発し「岡不知のたたり」と言われ、また古墳調査も必要なため、工事は中断されました。仏嶋山古墳の周りは表郷用水路で分断された様子が伺えます。
用水工事は昭和八年になって、やっと完成しました。　【藤代町史】より

野仏と舟形地蔵、
藤代町指定文化財でしたが、平成十七年取手市合併により指定解除されました。
水路脇に石仏がある道を、奥へ入ると舟形の光背を背負った大きい地蔵と野仏(のぼとけ)がある。

地蔵菩薩は舟形光背2ｍ49、立像高1ｍ79、寛文六年(1666)の建立。順海、祐海、順永の各権大僧都の名が刻まれている。
野仏は光背78センチ、座像55センチ、延命寺法印順海、延宝八年(1680)とある。この地蔵は舟形地蔵の裏にあるので「裏地蔵」とも呼ばれる。

大日山古墳(だいにちやまこふん)、高須第八番札所
この古墳は岡台地の先端に造営された古墳で、高さ2ｍ80、底径18ｍで副葬品は不明である。
かつてこの附近から各種玉類、鉄やじり等が発見されたが、築造年代は古墳時代後期でないかと言われている。近世になって大日信仰が盛んになるとこの墳丘に種々の石碑や石造仏が建てられたので、大日山の名はそれによって付けられたものと推定。
現在、墳丘上に岡神社が建立されています。

岡不知(おかしらず)、
岡の部落一帯の山は上人が夢に見た場所をなかなか見つけられなかったので、「岡不知」と呼ばれている。「不知」は、「ふち」と読むが「＊＊不知」のように、「＊＊知らず」とも読みます。意味は、知らないこと、知恵のないこと、かしこくないこと、「不知案内」と辞書には記載されています。
更に「＊＊不知」には、千葉県市川市の藪不知と新潟県の親不知子不知の有名な所があります。
不思議なことに、藪不知では平貞盛、親不知では平頼盛、岡不知では平將門と、平家が共通して登場します。落人(おちゅうど)の郷なのでしょうか。

「藤代町合併50周年記念誌」では、岡不知を「地元の人でも道に迷うほど、草木の茂る山」と説明しています。富士の樹海ではあるまいし、たかが海抜十m程で、広さも上野不忍池程度の林で、どうすれば道に迷うのでしょうか。あきらかに「不知」の解釈が間違えているとしか思えません。

千葉県市川市役所の前にある「八幡不知森(やわたしらずのもり)」は、藪不知(やぶしらず)として全国に知られた名所の一つです。この藪不知には古来多くの話が伝えられていますが、中でも次の話は有名です。

それは天慶(てんぎょう、將門)の乱の時、平貞盛がこの地に「八門遁甲(はちもんとんこう、陰陽道に基づいた呪術の一種、占いとは違います)の陣」を敷いたが死門の一角を残すので、この地に入るものには必ず祟りがあるとの言い伝えがありました。

後にこの話を聞いた徳川光圀は「馬鹿げた話」と藪に入ったところ、果たせるかな、白髪の老人が現れ「戒(いまし)め を破って入るとは何事か、汝は貴人であるから罪は許すが、以後戒めを破ってはならぬ」と老人の怒りを被ったといいます。

この他「藪不知」については、この地が行徳の入会地(いりあいち)であり、八幡の住民はみだりに入ることが許されず、そのため「八幡不知」と言われたのが藪不知になったともいいます。

將門没後「都」から逃げてきた家臣一族は後世に、遁甲(とんこう)としての社を大日後に建立し、人々が近付けないように図り、近寄りがたい所として他国の侵略から守るため、或いは、平將門の末裔である身分を隠す為に、怨霊説を広げ近寄りがたい所として「岡不知」としたのではないでしょうか。

以上のことから「不知」とは、人を寄せ付けない聖域や、平家の落人隠れ家の里と言えませんか。

親王山地蔵院延命蜜寺、高須弘信講第五番札所

真言宗豊山派、平將門の駒形があり愛馬が埋葬。

第七十四代鳥羽天皇の御宇(1107～1123)紀州国那賀郡根来(ねごろ)に覚鑁(かくばん)上人という高僧がいた。夢で「自分は下総国相馬郡岡村の地蔵である。

その昔滝口小次郎相馬將門は自分を何時も祈願し、朝晩に供養を受けた。しかしながら將門は前世の宿縁から朝廷に謀反を起し、逆族となり敵の矢で死んだ。貴僧も將門ゆかりの人である。急ぎ関東に下って一寺を建立すれば將門ゆかりのものはいうに及ばず、無縁の衆生まで救われるであろう」とお告げがあった。上人は不思議なことと思ったがその時はそのままにしていました。

十数年経った長承三年(1134)正月廿一日の子の刻、再び同じお告げがあり、上人は東国へ下る決心をして旅立った。方々訪ね歩いたが分からない。ある夜山王の地に到り草庵に宿を取ったところ、夜半になって山の麓が光っていた。奇異に思い庵主とともに辿って行くと、周りに堀があり、草木が生い茂った島に塚があった。庵主がいうには「この地に將門の霊廟があった」とのこと。上人が草を分けて入られたところ、中から一体の地蔵菩薩が見付かった。

上人はその場所を「仏島山(ぶっとうざん)」と名付け、翌年の保延元年(1135)一寺を建立し、親王山延命寺と名付け、庵主の覚如を一世と定めて根来に帰られた。延命寺はその後小貝川河畔の台地(現在地)に移転し、仏嶋山は古墳になっている。

岡堰と小貝川

寛永七年(1630)、関東郡代伊奈半十郎忠治によって開発された岡堰は、明治十九年、始めて新式の水門を持つ堰となったが、翌年の大洪水で壊され、明治三十一～三十二年、総工費64,219円余をかけて大改築された。その後昭和十二～二十一年につくられた水門、二十八～三十五年の工事で出来た洗堰があったが、現在のものは平成八年十一月に完成した。

小貝川の水源は栃木県那須烏山市曲畑(旧大赤根)の小貝ヶ池にあり、途中五行川などと合流しながら取手市で利根川に合流しています。子飼川、小飼川、子養川と云われ、養蚕の桑の木が多く見られた川岸から桑葉を餌とする、蚕を飼う川が小貝川の語源の一説で、源流にある案内板で説明されています。

岡堰の上流のつくばみらい市谷和原には福岡堰が、同じく下流の竜ヶ崎市に豊田堰があり『関東三大堰』と呼ばれ、谷和原三万石や相馬二万石の穀倉地帯をなし、米 野菜は勿論、魚等の食糧は江戸へ運ばれていました。壮大な穀倉地相馬二万石の開拓者である伊奈忠治の名は父忠次の埼玉県伊奈町についで、つくばみらい市の伊奈村として残りました。

水神岬公園

岡堰は古来、景勝地としてされてきましたが、とくに、明治三十二年煉瓦造りに改築してからは、赤茶色の明治的西洋風の構造物が青色の水に影を落とし、周囲の樹木の緑に映えて、一層その名が高くな

りました。
　それ以前の明治十九年四月八日、北白川能久親王殿下が岡堰を巡覧されてその風光を称賛され、桜樹植付料を賜ったので、当時の郡長**廣瀬誠一郎**が堤防上に植樹して以来、一躍、桜の名所として名を馳せました。

俳人高野素十、法医学教室に勤務していた大正七年(1918)水原秋桜子(しゅうおうし)の勧めで俳句を始め、後に高浜虚子に師事し、水原秋桜子と共に「ホトトギス４S」の一人といわれた、人気俳人であった高野素十(すじゅう)の故郷であり、帰省するたびに岡堰に名句を残していました。昭和51年享年83。

水喧嘩　徳川の遠に　さかのぼる　　素十

　この句のように、岡村と寺田村の水争いの歴史は古くからあったようで、渇水時は生死を掛けて争ったそうです。平成十七年藤代と取手の合併は、水争いがなくなった今になって実現したのでしょうか。

故郷の　喜雨の山王村役場　　素十

　　喜雨(きう、夏の土用の頃の雨)

　山王小学校前の山王公民館に句碑があります。

ふるさとを　同じうしたる　秋天下

　山王中学校創立十周年記念の集いで講演を行う、

女の子　枯れ木に顔を　あてて泣く

等を岡村に残している。
　我孫子の子の神大黒に於いて、手賀沼吟行が何回か行われて居り、ホトトギス４Sが集まっている。４Sとは、山口誓子，阿波野青畝(せいほ)の四人。四人の名の頭がSで始まる俳名からでした。

大山城主久寺豊後守、寺田字大山にあり「承平天慶(じょうへいてんぎょう)の乱(930～940)」の当時「久寺(くじ)豊後守」という、近郷きっての武将が居城し、平将門の家臣として、弟の丹後と大山城を固めていたが、天慶三年(940)に将門が敗死したことを知り、征討軍が大挙押しよせる難を恐れて城を捨て南方の我孫子に逃れました。
　後に、兄の豊後は、現在の我孫子市久寺家にて、弟丹後は我孫子市柴崎に隠れて帰農したという。
　久寺家の大炊(おおい)氏宅(大炊豊後守子孫)には、将門に関する天慶三年の位牌、及び違物の頚(くびき)天神という天神社があるということです。
　久寺豊後守は、通称を左馬之助と言っていたが、これが天慶三年に逃れてこの地に住むと、名を大炊と称するようになり、鎮守として日本武尊を祀り大鷲(おおわし)神社と称したと云われています。
　よって当時に於ける大炊氏の威勢の大なることをみることが出来、氏は江戸時代同地方の名主に就任した。弟の久寺丹後守は我孫子市柴崎に隠れ、一時は盗賊にまでに落込みはしたが、大井と名乗り村の名主になったという、両家共現在に至り祭りごとを行っているようです。このように、取手市新取手と我孫子市久寺家が歴史上で関連していた事に、歴史探索の面白さを感じます。

相野谷川、

　相野谷川沿いに、水の公園、新取手住宅東端を経て駒場、本郷へと相馬二万石の田園を左手に見ながら利根川の城根という所まで流れています。

　相野谷川は取手市内を流れる一級河川で４キロほど下流で利根川に合流する短い河川です。
　水源は、2014年の永山自治会役員様の聞取りにより、老人ホーム「さらの杜」の稲戸井駅寄りの「水砂」の谷地と判明しました。但し、更に水道は続いているのでさらに上流の可能性もありそうです。
　ゆめみ野駅の開業によって、団地が造営され、相野谷川上流の河川の一部は地下に潜ってしまいましたが、甚五郎池を含み自然湖沼を埋めてしまった後に、弊害が起きないか将来に不穏が過ります。
　相野谷という地名は、茨城県常総市の常総線北水海道駅は相野谷北端にあります。
　R294 と R354 の交差する近くに相野谷八幡神社が広大な大地の中にあり、水路が小さな谷間を形成している様子は「野の谷」といえるのかも。
　また、我孫子市天王台には、相野谷通りと相野谷跨線橋がありますが、相野谷跨線橋から約 500 m先の取手方面常磐線路上に踏切がありました「あいのや踏切」と言っていたそうです。常磐線複々線化であいのや踏切は撤去されました。

くじばさま　高井小学校前交差点

　博打は、鎌倉時代からあった様ですが諸説あり。博打は平和な江戸時代に流行り始め、享保15年(1730)八代将軍徳川吉宗は、富くじに限り「幕府公認」としました。ただし、富くじを行っていいのは寺社に限られ、それ以外は**私的な賭博行為**と見なされご法度のままでした。
　公許の富くじ興行の始まりは、京の仁和寺が江戸

の護国寺(池袋)で行ったものだそうです。

「江戸の三富」富くじのメッカは、谷中の感応寺(天王寺)、目黒不動、湯島天神。なんと、学業願掛祈願で有名な菅原道真を祀る湯島天神で「富くじ」？

戦前まで取手の「銭湯賭博」は、東京にまで知られた裏街道の世界では有名であった様で、湯舟の脱衣所で行われていたようで東京にまで及びます。

くじば様は下高井村の個人宅からの移設の様です。「博打で稼げますように」と願掛けする者が多かったと取手市史に記されています。

第七十八番、

野の井海老原医院脇広場の山の坊阿弥陀堂(現在集会所) 2005年に神社と大師堂は新築されました。

ご本尊、

阿弥陀如来三尊、脇侍は勢至菩薩と観音菩薩

移し寺、香川県仏光山郷照寺、

御詠歌、おどりはね念仏申す道場寺

拍子をそろえ鐘をうつなり

西蓮寺(廃寺)跡地と云われています、山の坊(山之房と書かれる)には西連寺という大寺があり、常総線の踏切先の野の井バス停近くにある「藤から地蔵」は西連寺の六地蔵の一体であると伝えられ、大きな山門もあったそうです。

天正時代(1573～1591)北条氏政と常陸の佐竹氏との合戦時に常陸勢に焼かれたとの伝承です。

打止

熊野神明神社、明治の寺社合祀令により、野々井の白山神社に合祀されましたが、平成十六年に村民により熊野神社を復活することができました。

海老原病院の診察室の建物脇に、屋敷門のある古い家があり庭先に四角い赤レンガで出来た古い煙突が立つ、明治から大正時代に操業していた醤油工場の名残です。

【四国移し寺の郷照寺(ごうしょうじ)】

境内からは瀬戸内海にかかる瀬戸大橋の眺望が素晴らしいお寺です。

往時から港町として栄え、四国の正面玄関といえる場所なので、高僧や名僧との由縁が深い霊場でもあります。地元では「厄除うたづ大師」と呼ばれ、また四国霊場で唯一「時宗」のお寺です。縁起によると、郷照寺は神亀二年に行基菩薩によって開創されました。行基菩薩は55センチほどの阿弥陀如来像を彫造し、本尊として安置され「仏光山道場寺」と称しました。

常総線ゆめみ野駅

ゆめみ野駅は東北大震災が起きた、2011年3月11日の翌日の開業でしたが、地震と津波の影響は常総線にも及び列車は終日不通、開業式典も中止となりました、この日12日は九州新幹線も開通記念式典を行う予定でしたが、震災被災者の悲しみを思い中止されています。

羯磨(かつま、こんま)金剛

五鈷杵(ごこしょ)を十字に組み合わせた密教の法具。

梵(karma)の音写。行為や所作、業(ごう)などと訳します。

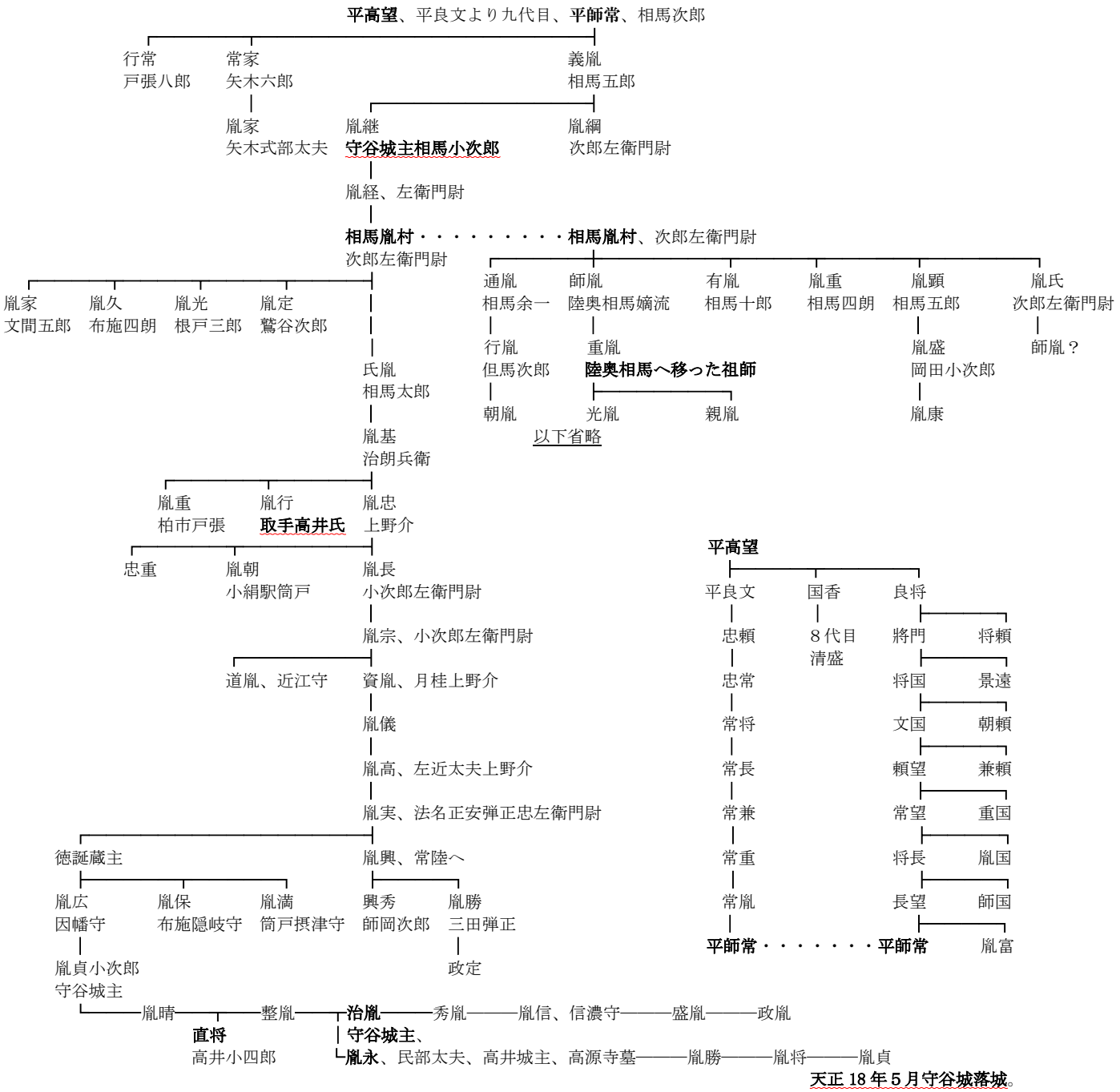
受戒や懺悔(ざんげ)の儀式作法具。天台宗では「かつま」、真言宗や律宗など南都(奈良、北都＝京都)諸宗では「こんま」とよみますが、書物では「かつま」と呼ばれる例が多い。

新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会参加者資料

下総相馬氏略系図、

◆　個人使用に限りますコピー厳禁。

鎌倉時代前期、源頼朝の重臣であった相馬師常の実子胤継により守谷城が築城され胤貞、治胤と受け継がれる。



我孫子市湖北の郷土の歴史研究会資料流用

平将門はなぜ常陸国衙（こくが：国の役所）を攻めたのか

天慶２年(939)11 月 21 日、平将門(37 歳頃)は常陸の国府(現、茨城県石岡市)を襲撃した。常陸介(ひたちのすけ)藤原維幾(ふじわらのこれちか)を捕縛し、印鑑(いんやく：国の印と倉の鍵)を得たのです、之は国の行政権と財政権を自由にできるということになる重大な事件であったのです。

事件のきっかけは、常陸の住人藤原玄明(はるあき)でした。玄明は常陸介の維幾とひと騒動を起こして将門に庇護を求め、将門は玄明を匿(かくま)ったのでした。維幾は玄明の身柄引き渡しを要求しました、しかし将門はこれを拒否したことで、両者に対立関係が生まれ。さらに、将門の宿敵である平貞盛が維幾のもとに身を寄せていたこともあり、将門は一千余りの兵を率いて常陸国の国府(石岡市)に向かったのでした。

貞盛と維幾の息子、藤原為憲(ためのり)は、およそ３千人の国軍を動員して将門軍迎撃に向かいましたが敗れ、国府は占領、国衙は焼失、貞盛と為憲は逃亡、維幾は捕らわれ、戦いは将門軍の勝利で終わりました。

この後、将門は東国の親王と祭り上げられ、下総、常陸、武蔵の民衆から慕われました。